厚木市史たより

創刊号

平成22年9月1日

題字は渡辺崋山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

錦絵　歌川広重「不二三十六景　相模川」（弘化４・1847～嘉永５・1852）佐野屋喜兵衛版　半切横１枚（飯田 孝氏蔵）
（解説は２頁参照）

創刊にあたって

厚木市長　小林常良

厚木市では、昭和五十八年に本格的な市史編さん事業を開始して以来、多くの方々の御尽力により、現在まで十巻の市史を刊行してまいりました。

今年度発刊予定の十一巻目は、全二十巻の折り返し点となります。

この新たなスタートに当たり、「厚木市史たより」を創刊することとなりました。

発刊にあたり、市史編集委員の神崎彰利先生を始め、担当の皆様から、思いのこもった玉稿をお寄せいただきました。

この「厚木市史たより」を通して、多くの市民の皆様に市史編さん事業について御理解いただくとともに、編さんの過程で新たに発見された市の歴史や、発展を物語る興味深い資料など、皆様が関心をお寄せになる事柄を紹介してまいります。

郷土の先人が育んできた、わが町の長い歴史に、思いを馳せていただければ幸いです。

錦絵「不二三十六景」

厚木市史編集委員会委員長　飯田　孝

ここに紹介する錦絵（表紙参照。筆者蔵）は、風景画の名手として知られる浮世絵師広重が、海老名市門沢橋あたりから、相模川と対岸厚木市戸田、富士山・大山・丹沢の山なみを画いたものです。錦絵は、色あざやかな多色ずりの浮世絵版画であり、現在でも美術品としての評価が高いものとなっています。

天保期（一八三〇～一八四三）、江戸を発った広重は、東海道を下り、田村（平塚市）で相模川を渡る大山街道に入り大山に参詣しました。この旅の帰路、広重は往路より江戸への近道である、戸田の渡しで相模川を渡る大山街道を通って帰着したものと思われます。

広重が画いた錦絵「相州大山道中戸田川之渡」「不二三十六景 相模川」（本図）、「冨士三十六景 さがミ川」の三図には、この旅で画いた広重のスケッチが、原画として用いられたことが考えられます。

本図に画かれた大山の姿と、その背後にのぞく富士山の位置、丹沢の山なみは、「不二三十六景」を画くという主題を考慮に加えれば、門沢橋辺りから遠望する現在の風景とほとんど同じです。この点に着目すれば、本図は広重のスケッチ原画に近い構図である可能性が高いのです。

大山参詣の帰路、戸田の渡しでふり返った広重は、帆かけ船が浮かびゆったりとした流れをいかだが下る相模川を背景に、大山と富士山が一望できる風景に、しばし印象深いものを感じたのでしょう。

「不二三十六景」シリーズとは組み合わせが異なる、広重最晩年の傑作「冨士三十六景」シリーズにも、本図とは大きく構図を変えた「さがミ川」風景が、再び登場します。

江戸から大山に向う主な街道には、赤坂御門（東京都港区）を起点とする矢倉沢往還、東海道柏尾（横浜市戸塚区）から分かれる道、東海道四谷（藤沢市）から分かれる道の三本があります。

矢倉沢往還がかかる厚木渡船場（厚木市東町）からは富士山の姿は大山にかくれて見えません。東海道四谷から分かれる道の田村渡船場（平塚市）では、大山と富士山が並立して見えますが、田村渡船場を画いた広重の錦絵では、背景に大山のみを配する構図となっています。東海道柏尾から分かれる道が相模川を渡る戸田渡船場（厚木市）辺りでは、相模川の背景に大山の山なみと富士山の姿を、一体の画面としてとらえることができます。

参考文献

『厚木市史』近世資料編(3)文化文芸
『伊勢原市史』通史編近世
『海老名市史』7通史編近世

（飯田　孝氏は平成二十二年八月十五日　御逝去されました）

厚木市史について

厚木市史編集委員会近世編部会
部会長　神崎　彰利

『厚木市史』は、市民の皆様の御援助により、現在全二十巻のうち十巻の刊行を終えました。文字通り〝道半ば〟ということですが、これを機に筆者の担当する近世（江戸時代）の厚木市史にみられる特徴の幾つかを御紹介しておきたいと思います。

多くの方々御存知の彼の渡辺崋山が、厚木を小江戸とよんでいます。厚木には、商業の繁栄の根底にすぐれた文化があり、平成十五年、『厚木市史』近世資料編(3)文化文芸にその一端を刊行しましたが、こうした資料編は他の地域ではまとまるものではなく、厚木ならではの先人の文化の創造と伝承の結果に外なりません。

もう一つだけ政治面に目を向けますと、これも御承知のように厚木は陸上・河川交通の要衝です。政治的には荻野山中藩と下野国（栃木県）烏山藩の陣屋が設置されていますが、こうした例は県内では厚木だけです。そして慶応三年（一八六七）十二月、荻野山中藩陣屋は薩摩藩邸浪士に焼討されましたが、これが明治維新の大きなきっかけになりました。

厚木の歴史の一面です。

登山一号墳出土の形象埴輪

厚木市史編集委員会委員　望月 幹夫

厚木の古墳時代を考えるときにすぐに頭に浮かぶのは登山一号墳の埴輪です。登山古墳群は、尼寺原台地の北縁、東京工芸大学の東側で、小鮎川を見下ろす崖の上にあります。五基の古墳から成り、埴輪を出土した一号墳は消滅しましたが、残りの四基は「登山古墳史跡公園」として整備されています。昭和四十二年（一九六七）に行われた発掘調査では、男子・女子・馬・鶏・家などの形象埴輪のほか、円筒埴輪が多数出土して、初めて古墳の発掘に参加した私は非常に興奮したことを覚えています。

形象埴輪は壊れて一部しか残っていないものがほとんどですが、全体の形のわかるものが三個あります。冑をかぶった武人、坊主頭の力士、堅魚木を飾った家です。坊主頭の男子は、股間にも帯状のものがあった痕跡が残っており、まわしを締めていたと考えられるので力士とわかりますが、全国的にも数の少ない珍しい埴輪です。家は寄棟造りで、棟に堅魚木を飾っているので、位の高い人の住む家を表していることがわかります。この家の珍しいところは、扉を表現し、しかも内側に開いた様子を表していることです。

さて、登山一号墳は厚木市で埴輪を出土した唯一の古墳です。これらの埴輪はどこで製作されたのでしょうか。古墳の周辺では埴輪を製作した遺跡は見つかっていません。現在までの研究では、埼玉県の地域で生産され、はるばる運ばれてきたと考えられています。

ところで、神奈川県内では、横浜・川崎から三浦半島にかけては埴輪を出土する古墳が比較的多く見られますが、それ以外の地域では埴輪を出土する古墳は数が限られており、しかもこれだけ多くの種類がそろっているのは登山一号墳だけです。現在、埴輪は一括して神奈川県指定文化財となっており、厚木市郷土資料館で見ることが出来ます。千五百年前の埴輪との対話をぜひお楽しみください。

登山１号墳出土埴輪
手前から冑をかぶった武人・坊主頭の力士・堅魚木を飾った家

『事務報告書』について

厚木市史編集委員会委員　内藤 佳康

明治二十一年（一八八八）四月十七日市制・町村制が公布され、翌二十二年四月より施行されました。市制・町村制は、立憲君主制のもと地方行政組織を再編した制度でした。このことにより、各町村長は町村議会に毎年の予算表を提案するときに併せて事務報告と財産明細表を提出しました。

制度発足当初は具体的な報告事項の内容まで示されておりませんでしたので、各町村独自の報告書が作成され報告されていました。

右は明治25年（1892）荻野村事務報告、中は明治38年荻野村事務報告財産明細書、左は昭和14年荻野村事務報告

このことは県下の町村状況把握をするためには甚だ不都合であったようで、明治二十八年（一八九五）十月二十九日、神奈川県では統一した事務報告書となるよう雛形を示しました。この雛形には町（村）会、選挙、吏員（りいん）交（更）迭、庶務、戸籍、兵事、教育、衛生、勧業、土木、社寺、土地、収税、会計、財産、営造物の十六項目が示されました。明治二十二年以降の行政の担う重要な事務や課題は何か、から生み出されたものと考えられ、およそ五十年間その時代背景を加味した項目が加えられることはありましたが、終戦まで基本形は変わることはありませんでした。

今回の調査の結果、一六八点の事務報告書が発見されました。従来、市制・町村制が施行され、しばらく事務報告書は作成されなかったのでは、とされてきましたが、町村制度が開始された明治二十二年の第一回事務報告書が、荻野村役場文書から発見されたのは、県内では初めてです。

厚木市では編さん事業の一環としてこの事務報告書を各村役場単位に翻刻作業をし、九冊に纏めました。この事務報告は、その時、その時代を映した内容が記述され、私たちに「近代の歩み」を伝えてくれます。次回からは事務報告に記載された内容について紹介してまいります。

厚木市史歴史講演会の御案内

演　題　**唐から来た古代仏教**
－円仁法王寺釈迦舎利蔵誌をめぐって－

講　師　**鈴木 靖民** 氏
厚木市史編集委員　國學院大學教授

日　時　平成22年10月2日(土)午後2時から

場　所　ヤングコミュニティセンター5階 大会議室

その他　入場無料、直接会場へおこしください。駐車場はありません。

講師　鈴木 靖民 氏

★日本古代史研究の第一人者 鈴木靖民氏は、中国河南省法王寺で新たに発見された円仁（慈覚大師、794～864）の名を刻んだ石板の現地調査にあたられました。こうした最新情報とともに『厚木市史』古代通史編の編集に向けて厚木の古代寺院についてもわかりやすく解説していただきます。

厚木市史たより　創刊号

平成22年9月1日発行
編　集　厚木市教育委員会文化財保護課
発　行　厚木市
住　所　神奈川県厚木市中町3-17-17
電　話　〇四六-二二五-二〇六〇
FAX　〇四六-二二三-〇〇八六

厚木市史編さん関係者（敬称略・順不同）

■市史編集委員会
（平成21年4月1日～平成23年3月31日）

職　名	氏　名	担　当
委員長	飯田　孝	近世ほか
委員長職務代理者	内藤佳康	近代・現代
委　員	神崎彰利	近　世
同	望月幹夫	原始・古代
同	鈴木靖民	原始・古代
同	山田雄二	民　俗
同	落合清春	民　俗

■市史編さん委員会
（平成22年6月1日～平成25年5月31日）

職　名	氏　名
委員長	樋口雄一
副委員長	井上隆之
委　員	亀井喜美子
同	杉山　貴
同	内田忠行
同	前場幸治
同	飯田　孝
同	加藤芳明
同	中川匡子